クローズアップ

『詳説日本史』『高校日本史』の執筆にあたって

設楽 博己

筆者が執筆を担当したのは、『詳説日本史』（日探705）の第１章「日本文化のあけぼの」の「１文化の始まり」と「２農耕社会の成立」、『高校日本史』（日探706）の第１章「日本文化のあけぼの」の「１日本文化の始まり」と「２農耕の開始」であり、時代は旧石器時代から弥生時代におよぶ。旧版（『詳説日本史　改訂版』〈日B309〉、『高校日本史　改訂版』〈日B314〉）からの変更の要点は両書ともほぼ同じなので、ここでは『詳説日本史』（日探705）にもとづいて記載する。

まず、旧石器時代であるが、内容に関わる変更はほとんどおこなっていない。ただ、「日本列島と日本人」の項で、旧版ではまず地質の記述があってそのあとに人類の記述があるが、それを逆にして、どのような人々によって旧石器文化が構成されて、その人々がどのような環境で暮らしていたのかという筋立てにした。また、「旧石器人の生活」の項では、環状のキャンプサイト、「落とし穴」、調理の場とされる「集石」など、遺構の面から生活の実相に触れられるようにした。

つづく縄文時代では、「縄文文化の成立」の項で、縄文文化の始まりを土器の出現を指標にして、旧版の約１万3000年前から約１万6000年前に、縄文文化の終わりすなわち弥生時代の始まりは約2500年前から約2800～2500年前に改めた。これは、AMS法（加速器質量分析法）という新しい^{14}C（炭素14）年代測定の進展と年輪年代法によって^{14}C年代を実年代に較正する技術と研究の進展にもとづく。幅をもたせているのは、北部九州地方と東日本の弥生文化の始まりの時期にズレがあるからである。

それに続いて、約１万1700年前以降に縄文文化が急速に発展することを記した。これも^{14}C年代測定の成果であるが、この頃、世界的な再寒冷期であるヤンガードリアスが終了して、名実ともに氷河期が幕を閉じる。そしてそれに続く温暖化によって定住生活が促進されて貝塚も登場するなど、だれもが縄文時代とみなす範囲の目安になるので重要である〔谷口2019〕。

「縄文人の生活と信仰」の項で、旧版には「一部にコメ・ムギ・アワ・ヒエなどの栽培も始まっていた可能性が指摘されているが、本格的な農耕の段階には達していなかった」との記載がある。きわめて適切な表記なのだが、現在その可能性が乏し

くなったので割愛した。その根拠はレプリカ調査の進展と^{14}C年代測定である。

レプリカ調査とは、土器の表面にある植物の種子などの圧痕にシリコンを注入して型取りして圧痕のレプリカを作成し、それを走査型電子顕微鏡で観察して植物の種を同定する作業である。この方法による調査の全国的な進展によって、これまで縄文時代前期の可能性が説かれていたイネなどの穀物の出現は、縄文時代晩期最終末をさかのぼらないことが確認されている〔設楽2022〕。

また、縄文時代後期とされるイネの炭化種実の^{14}C年代測定をおこなったところ古代以降という結果が出された例がある一方で、年代測定によって縄文時代晩期最終末をさかのぼった炭化穀物の事例は、雑穀を含めて今のところない〔國木田ほか2021〕。

このように、縄文文化は採集・狩猟を基礎にする文化であったが、単純なものではなかった点も近年発掘調査の結果をふまえて論じられるようになってきた。たとえば、環状列石や環状集落の中心が墓地になっている状況から祖先祭祀が芽生えていたのではないかという研究がある〔谷口2017〕。さらに縄文時代後期以降、東日本の各地で検出されている環状盛土遺構など、協業による大規模遺構の存在から、縄文時代が停滞的で平板な社会ではなくて、とくにその後半期に儀礼によって社会を統合するような複雑な社会に移行していったことを少し強調した。

トチノキの種実に特化したアク抜きのための水さらし用の木組遺構が、後期以降の東日本で顕著になるのも、近年各地の発掘調査で確認されるようになった。これもまた採集狩猟社会における技術の高度化を示すものであり、今回は注(教科書p.9注⑦)に回したが、紙幅に余裕があれば、写真などを示してもっと大きく扱ってもよかったと思う。やはり紙幅の都合から、旧版のコラム「年輪年代法と炭素14年代法」を割愛せざるをえなかったのも残念だった。

弥生時代は、その開始年代と縄文時代との境界をめぐって記述を改めた。どのように改めたのか、その根拠とともに示しておこう。

もっとも大きな変更は、水稲耕作の始まりを前8世紀頃にしたことである。これは前述の縄文時代と同様に、^{14}C年代測定とその較正結果にもとづく。国立歴史民俗博物館が提起した弥生時代の開始年代は、当初様々な批判があり現在も論争は続いているが、おおむね紀元前10〜前8世紀で学界の評価はかたまりつつある。

また、縄文時代の6期区分に合わせて、弥生時代早・前・中・後期の4期区分を示したが、弥生時代早期を認めたのは、前・中・後期としていた旧版(注で早期説を紹介している)との大きな違いである。旧版では、弥生文化は弥生時代前期に成立したとする。その場合の弥生文化の指標は、水稲耕作に加えて青銅器や鉄器の「金属器」、石包丁など「大陸系磨製石器」と「機織具」があげられる。しかし、早期にはすでに水田、木製農具、大陸系磨製石器、機織具、環濠集落、戦争による殺傷人骨など、弥生文化の要素が取り揃えられている。

早期の弥生文化がおよぶ範囲は北部九州に限られるので、西日本一帯に広がる前期の遠賀川文化の成立をもって弥生時代とすべきだともされるが、最古の前方後円墳である箸墓古墳が出現する時期には、まだ大半の地域は墳丘墓・方形周溝墓が支

配的だったのと同じ理屈で、弥生文化の要素が揃う弥生時代早期を時代区分の画期として重視した。

一方、鉄器は弥生時代前期末ないし中期初頭までその出現が遅れるため〔春成2003〕、記述を改めた。青銅器でもっとも古いのは弥生時代前期であり、さらに前期終末以前の出土数は少ない。したがって、金属器は弥生文化を通じた指標にはならない。弥生時代の前半は基本的に石器時代であり、弥生時代は初期を除けばその大半の時期は鉄器をもっているので、弥生時代全体が鉄器時代であるとの理解は困難である。この改訂も、^{14}C年代測定とその研究にもとづく。

そのほかのおもな変更点は、近年の中国東部、東北部の研究によって日本列島への稲作伝来について山東半島経由説が有力になった〔宮本2009〕ので、地図「稲作の伝来ルート」を割愛して注で示した点、弥生時代には湿田や乾田はないとする説〔田崎1989〕を重視して、半乾田など土地条件の違いに応じた営農形態の多様な展開を加えた点、銅鐸や土器の絵画の分析から、シカと鳥の信仰が農耕を背景にするという踏み込んだ解釈〔春成1991、金関1982〕を紹介した点などである。また、弥生時代中期の共通の青銅祭器を用いた地域圏の地図の復活を望む声が現場から強いのに鑑みて、新しい情報にもとづいて復活させた（教科書p.16「青銅製祭器の分布」）。

以上が、筆者が執筆を担当した箇所の、おもな変更点である。

「日本史探究」がはじまり、これまでの授業とかわってくる点も出てくるだろう。教科書も、問いが設けられたり、生徒がみずから考えるための工夫がほどこされたりと、変化が大きく、一抹の不安を覚えるかもしれない。しかし、山川出版社の『詳説日本史』（日探705）、『高校日本史』（日探706）は、その大きな特徴として、ともに「信頼できる記述である」ということに、旧版とかわりはない。この２つの教科書が、学校現場で日本史を探究するための材料となることを願い、結びとしたい。

主要参考文献

金関恕「神を招く鳥」（『考古学論考――小林行雄博士古稀記念論文集』p.281～303、平凡社、1982年）
國木田大・佐々木由香・小笠原善範・設楽博己「青森県八戸市八幡遺跡出土炭化穀物の年代をめぐって」（『日本考古学』52、p.59～73、2021年）
設楽博己『縄文vs.弥生――前史時代を九つの視点で比較する』（ちくま新書1624、筑摩書房、2022年）
田崎博之「地形と土地と水田」（『古代史復元』4、p.56～67、講談社、1989年）
谷口康浩『縄文時代の社会複雑化と儀礼祭祀』（同成社、2017年）
谷口康浩『入門　縄文時代の考古学』（同成社、2019年）
春成秀爾「角のない鹿――弥生時代の農耕儀礼」（『日本における初期弥生文化の成立――横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ』p.442～481、横山浩一先生退官記念事業会、1991年）
春成秀爾「弥生早・前期の鉄器問題」（『考古学研究』50-3、p.11～17、2003年）
宮本一夫『農耕の起源を探る――イネの来た道』（歴史文化ライブラリー276、吉川弘文館、2009年）

（したら・ひろみ／東京大学名誉教授）

クローズアップ

『詳説世界史』の執筆にあたって

木村 靖二

新たな世界史教科書では、新科目「歴史総合」の導入や、執筆者の交替もあって、これまでの教科書のかなり大きな編成替えが必要になった。今回の学習指導要領では、世界を諸地域の歴史ととらえ、古代からの発展過程をそれぞれの地域の都市国家から広域国家形成への進化過程と相互の交流、さらに多神教混在時代から一神教優位世界への転換などと重ね合わせて考えさせることが求められている。こうしたことはこれまでも指摘され、部分的に取り入れたことがあったが、全体的にそれにもとづいて編成するというのはやはり大きな改訂であろう。

具体的には「中央ユーラシア」の地域設定やイスラーム世界の詳しい内容の記述、また南北アメリカ地域の立ち入った説明などにおいて諸地域設定の特徴がよく現れているように思われる。もっとも以前の教科書でもそうであったが、世界史のなかで日本の位置や特質を考えさせるという点では、第Ⅰ部・第Ⅱ部での日本の記述の少なさは今後の課題である。

世界史探究の『詳説世界史』（世探704）では、今回から教科書の判型を大きくしたことから、カラー図像・図版が多くなり、解像度も向上したことで、みやすくなったのではないかと思う。現場での説明もしやすくなったはずで、またその選択や訳にかなり苦労させられた史料もかなり多く掲載することができた。ぜひ有効に活用してほしいと願っている。もっとも、選択などに関しては、執筆者側の思い込みも当然あるので、現場での使い勝手を含め、図版や史料についての助言や提案をいただければありがたい。

私の関係する18世紀末から現代までの近現代部分では、新しい執筆者を得て、内容にもかなり変更があった。さらに章別編成などでの配置変更があったし、記述の削除や説明の簡略化をよぎなくされることも増えた。

配置替えの例では、たとえば第12章で、これまでのアメリカ・フランス・中南米の革命が別れて配置されていたのが、環大西洋革命として理解できるよう連続して配置されるようになった。さらに、中南米に関していえば、記述も古代からより詳しく記述されるようになった。これは、これまで中南米地域の記述が比較的簡略に扱われてきたからでもある。しかし、だからといって、教科書のページ数を増やせ

ばよいとはいえない。そのためどうしてもこれまでの教科書を精査して、やや詳細に説明されてきた事項から主旨には影響をおよぼさない範囲で簡略化できる部分を削除せざるをえなくなった。その一例としてあげられたのが、かなり詳細であるとの指摘が以前からあったフランス革命の記述である。そこで今回は「球技場（テニスコート）の誓い」が削除対象の１つになった。個人的にいえば、かつて教科書ではじめてこの用語をみたとき、当時のヴェルサイユ宮殿にテニスコートがあったのかという驚きと同時に疑問がわいたことを忘れられない用語であるのだが。

ほかにも、「ヴェルサイユ行進」や「ラ＝マルセイエーズ」などが、精査した結果として削られることになった。説明や項目がいきなりなくなるのは困るという声が出るのはもっともなことだが、新しい学習指導要領において、諸地域間相互の連関を重視しながら、それぞれの革命の目的の相違とその理由を考えさせるのであればやむをえないのだろう。こうした例はほかにもあるだろうが、是非ご理解いただきたい。

ところで近代・現代を扱ってきて、直接『詳説世界史』の内容に関わることではないが、以前から気になっていることがある。冒頭の「世界史を学ぶみなさんへ」でも触れたことだが、20世紀後半から急増している独立国家の数についてである。世界史の教科書では諸地域を規準として、それぞれの成立・交流（衝突も交流の１つである）を対象とするが、近現代では有力な国家、あるいは国家の連合体を対象にして、その歴史（政治・経済の動向や社会状況）を扱うことが多いはずである。しかしそうした扱い方は1950年代までのように有力国家の数が限定されていればなんとかなるが、現在では国家自体の数が200近くなり、有力国家も絶えず変動し、しかも変動の終わりも不透明になっている。しかし、こうした混沌とした時代こそ、歴史を振り返り、そのなかで生きた人々や未来への突破口を見出そうとした思想家や指導者の努力から学ぶことが重要ではないだろうか。

「すべての歴史は現代史である」といわれるが、それは人が歴史に関心を抱くのは、結局現在を知りたい、現在はどういう時代なのかを理解したいからである。だとすれば、混沌とした現代の位置や問題を探るのうえで、新しい『詳説世界史』はその手助けになるはずと期待している。

（きむら・せいじ／東京大学名誉教授）